



岩切章太郎による観光資源としての海岸景観利用



南九州大学環境園芸学部、南九州大学大学院園芸学・食品科学研究科
造園計画研究室 教授

関西 剛 康 せきにし たかやす

【略歴】1964年京都生まれ。1987年3月大阪芸術大学芸術学部環境計画学科を卒業後、日本を代表する作庭家 中根金作教授(元大阪芸術大学長)の榊中根庭園研究所設計部に入社し、国内外にて100件超の都市公園や庭園等々のプロジェクトに20年間従事。途中、社会人学生として1999年3月同大学院芸術文化研究科博士課程(後期)修了(芸術文化学)。2007年4月より南九州大学、現在に至る。【専門】都市公園・都市緑地・景観計画・庭園の計画設計(ランドスケープ工学)、日本庭園史(造園学)。【資格】技術士(総合技術監理部門・建設部門:都市及び地方計画)、登録ランドスケープアーキテクト(RLA)など。【受賞】緑のデザイン賞「緑化大賞」(2008)、学校ビオトープ大賞(2014)など。【著書】『自然をみつめて』(鉱脈社2017共著)、『知日42枯山水』(中信出版社2017共著)、『プラタモリ18』(KADOKAWA2018共著)など。【外部委員】国土交通省宮崎ワシントンニアバーム維持管理検討会、宮崎県景観まちづくりアドバイザー、宮崎県美しい宮崎づくり推進有識者会議長、景観計画策定委員長(都城市・延岡市・えびの市)、NHK九州沖縄地方放送番組審議会など。

1. はじめに

わが国は近年、欧州の先進的な景観行政を参考にしながら、「景観法」(2005年施行)や「歴史まちづくり法」(2008年施行)などの景観や歴史的風致に関する法制度を整えて運用している。そのため各自治体は、良好な景観を観光や地域間の交流促進に役立つことを視野に入れて、「総合的なまちづくり」に取り組むよう求められている。

このような背景のなかで宮崎県では、ひとつに南国景観のイメージによって観光事業と都市景観形成が推進されてきた近代史がある。これを推進してきた人物として、宮崎観光の父と称される宮崎交通の創業者「岩切章太郎」(1893~1985)氏を外すわけにはいかない。岩切氏は「大地に絵を描く」という理念をもって、昭和初期から日南海岸にフェニックスの植栽を始め、こどものくに、フェニックスドライブイン、サポテン公園、えびの高

原などの多数の観光事業を手掛けた人物として周知されている。

しかし、岩切氏が影響を与えた観光事業による景観形成が、どのような経緯で、どのような景観手法を用いて、どのような効果などを生み出したかについては意外と整理されておらず、広く県民に理解されていないところも多分にある。そこで、ここに再考を試みるが、ただ本稿の紙面の都合もあり、主に日南海岸における海岸景観の利用に着目して論じることとする。

2. 日南海岸の観光の始まり

1) 遊覧バスにおける2つの基本方針

ことの始まりは1928(昭和3)年に、九州観光の祖と称される大分県別府市の「油屋熊八」(1863~1935)氏の経営する亀の井自動車(現在の亀の井バス)が、日本で最初の女性バスガイドによる「別府地獄めぐり」を観光目的とした遊覧バ

スを運行させたことに端を発する。これを知った隣の岩切氏は、宮崎県の観光振興を考えて、全国で3番目となる遊覧バスの運行を1931(昭和6)年に開始する。

運行開始にあたり、すでに国内観光が旺盛な時代であり、宮崎の遊覧バス事業は、目の肥えた観光客に他県と比較されても引けを取らない観光事業としてデビューする必要があった。ただ別府とは異なり、宮崎には有力な温泉という観光資源がない。そこで岩切氏は、宮崎の特性を感じる2つの観光資源の利用を考えた。

そのひとつは、他県にない神都宮崎がもつ建国三千年の歴史イメージと調和して、以前から参拝客が多かった宮崎神宮や青島神社などの「歴史文化資源」の利用であった。

そして、もうひとつは、南国イメージと調和して、日南海岸の青島亜熱帯性植物群落^{注1)}のビロウ樹や鬼の洗濯板、それに青く広大な海などの宮崎特有の「自然環境資源」の利用であった。

2) 宿泊型観光ルートの開発と修正

当時も観光産業の活性化を考える基本スタンスは「通過型観光」よりも、いかに「宿泊型観光」によって消費活動を促すかにあった。しかし、当初の南宮崎駅付近にあった宮崎交通本社を出発して、宮崎神宮、生目神社、青島神社と宮崎市を巡る遊覧バスコースでは運行距離と時間が短く、宮崎市内に宿泊しないで他県に移動してしまう観光客が多くなった。そこで岩切氏は、近隣の生目神社を外してより遠距離にある鶴戸神宮(日南市)

を新たな観光地とした広域観光コースへと修正を施した。結果これにより、宮崎市内に宿泊する観光客の増加が図れるようになった。

3. 日南海岸における南国景観の創造

1) 自然な南国イメージの景観形成

岩切氏は1937(昭和12)年から、鶴戸神宮への遊覧バスコースの途中にあたる日南海岸入口の「堀切峠」にフェニックス^{注2)}を植栽し始めた。この動機は、観光客に海の景色を単に眺望させただけでは、他県と同様の海の景色となってしまうと考え、亜熱帯性常緑高木であるフェニックスの幹や葉を通して、海の景色を眺望させることで、強烈に南国イメージを観光客に印象づけようとしたことにある。そして、フェニックスを配植する際には、街路樹植栽のように等間隔や直線に並ぶような人工的な配植を避け、わざと不均等に配植して、あたかも自然で昔からあるような景色に仕上げる配慮をした(次頁写真1)。

2) 南国イメージを額縁効果で強調

さらに岩切氏が「見る枠」と著している、景観工学における「額縁効果」(フレーム効果)と呼ばれる景観手法を用いて、フェニックスの植栽をしたことで、より南国イメージの印象が良くなっている。

この「額縁効果」とは、眺める風景を何らかの額縁状態となる枠の役割をする形状で切り取ることにより、眺望景観の印象を強くする効果のことである。岩切氏の場合、この亜熱帯性常緑高木のフェ



写真1 82年前からある堀切峠のフェニックスによる南国景観

ニックスをその額縁にあてた。現在に続くインスタ映えとなるピクチャレスクなフェニックスに縁どられた海の景色の前で、観光客に記念写真を撮影させる観光目的をつくったのである（写真2）。

3) 南国イメージのシークエンス景観

「宿泊型観光」推進のために観光コースに遠方の鵜戸神宮を入れたが、その往復路で単調な海の景色を見せているだけでは退屈させてマイナス効果となる。そのため、岩切氏は観光客を退屈させない方策のひとつとして、日南海岸沿道にフェニックスを次々と植栽していった（次頁写真3）。

これも「額縁効果」を考慮してのことであり、これを岩切氏は「動く枠」と著

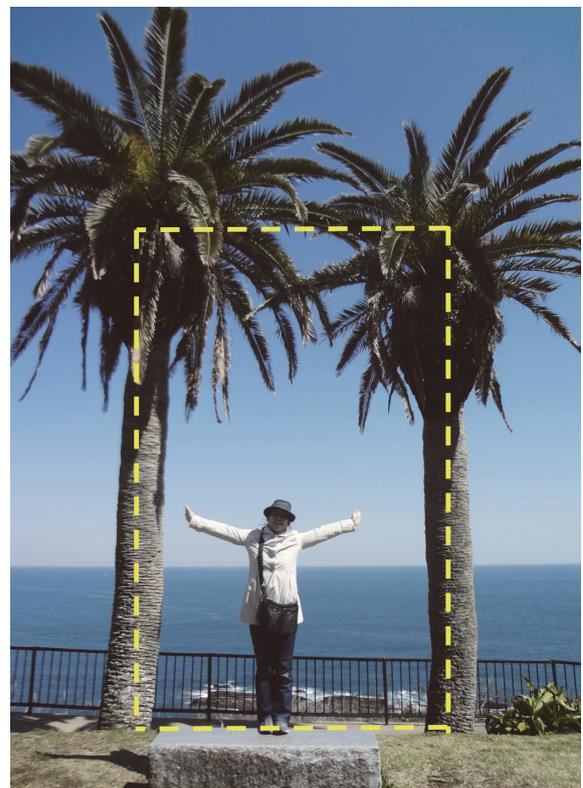


写真2 フェニックスを用いた額縁効果によって南国景観を強調



写真3 日南海岸沿道に植栽されているフェニックスの並木

しており、車窓からの次々と移り変わっていくシークエンス景観^{注3)}も、フェニックスの幹や葉越しに眺望させることで、海の景色を南国景観として連続的に観光（体験）させたのである。そこには、女性バスガイドによるアナウンス（解説）も加わり、より南国情緒が増したことで観光地満足度とホスピタリティの向上を図ったのであった。

4. 海の景色を利用した借景手法

さらに岩切氏は、青島や鬼の洗濯板などの景色を利用した景観手法によって、観光開発を行っていたが、これに関してはあまり理解されていない。ここに「こどものくに」と「フェニックスドライブ

イン」（現在の道の駅フェニックス）において、岩切氏が手掛けた景観構成のなかで「借景」手法について少し紹介しよう。

1) 基本的な借景の景観構成とは？

まず、よく日本庭園に用いられている基本的な「借景」の景観構成を解説する。例えば、目の前の「近景」となる庭園越しに、敷地の外にある山や樹林などの「遠景」となる視対象の自然環境を、庭園景観の背景として取り込み一体として眺望させることで、ダイナミックで遠近感溢れる景観を構成できるのが借景手法である。

その際、より効果的に遠近感を演出するために、「近景」「中景」「遠景」と多重層に各景観を構成する場合が多い。ま

た、「近景」「中景」「遠景」の景観ごとに生垣や土塀、芝生築山の稜線などのラインによって景色を切って独立させ、目立たせた方が、より明確に奥行感を演出できるのである。岩切氏はこれを理解して観光開発をしていたのである（写真4、5）。

2) こどものくにの借景

岩切氏は当時、こどものくにの造営に際し、「借景という日本の庭園造りの手法が絶えず考えられ、使用されている」と明確に借景手法を意識しており、「蘇鉄の展望台、竜舌蘭の展望台から見た景観など、借景の最もいい例」と著している。この入口すぐ近くに最も良い視点場として設けられた「蘇鉄の展望台」からの景観について、「海岸の白い波頭の線を蘇鉄の丘でどう切っていくかが、一番のポイント」と考え、さらに「太平洋と、青島（中略）とをすっかり景色の中にうまく取り入れたこと、川向こうの堤防の上をラクダを歩かせてみたり、海岸の白い波頭や、青い堤防の一直線を、いろいろの植物でうまく調子をつけながら切っていく細かい心遣いなど、見る人は立派に

見ていただくのではないかなと思う」と考えていたとある^{注4)}。

これについて解説をすると、岩切氏は観光客が最初に遠くまで一望できる「蘇鉄の展望台」を視点場としつつ、亜熱帯植物のソテツと一緒に撮影できる南国イメージの「近景」として展望台を整備した。そして、遊具や植栽を美しく配置した園内の「中景」を見せながら、ラクダが往来した堤防のラインで「中景」と「遠景」を区切りつつ、その遠方に白波が立つ海と青島の宮崎ならではの自然景観の「遠景」を一体的に俯瞰させるダイナミックなパノラマ景観を丁寧に構成していたのである。まさに当時の観光客にとっては、南国宮崎を満喫できる撮影ポイントであった（次頁写真6）。

3) フェニックスドライブインの借景

岩切氏は、沿道を走る自動車から誰もが、フェニックス越しに海の景色が眺望できるように、ドライブインの建物を山側に位置させて、海側を開放して景観を構成したことは周知のことである。しかし、崖下の鬼の洗濯板を俯瞰する景観構成にまで注意を払っていたことはあまり

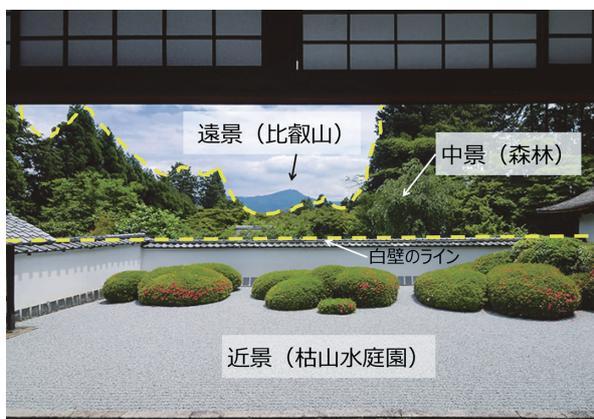


写真4 借景の景観構成の事例①
(京都市：正伝寺)



写真5 借景の景観構成の事例②
(島根県：足立美術館)

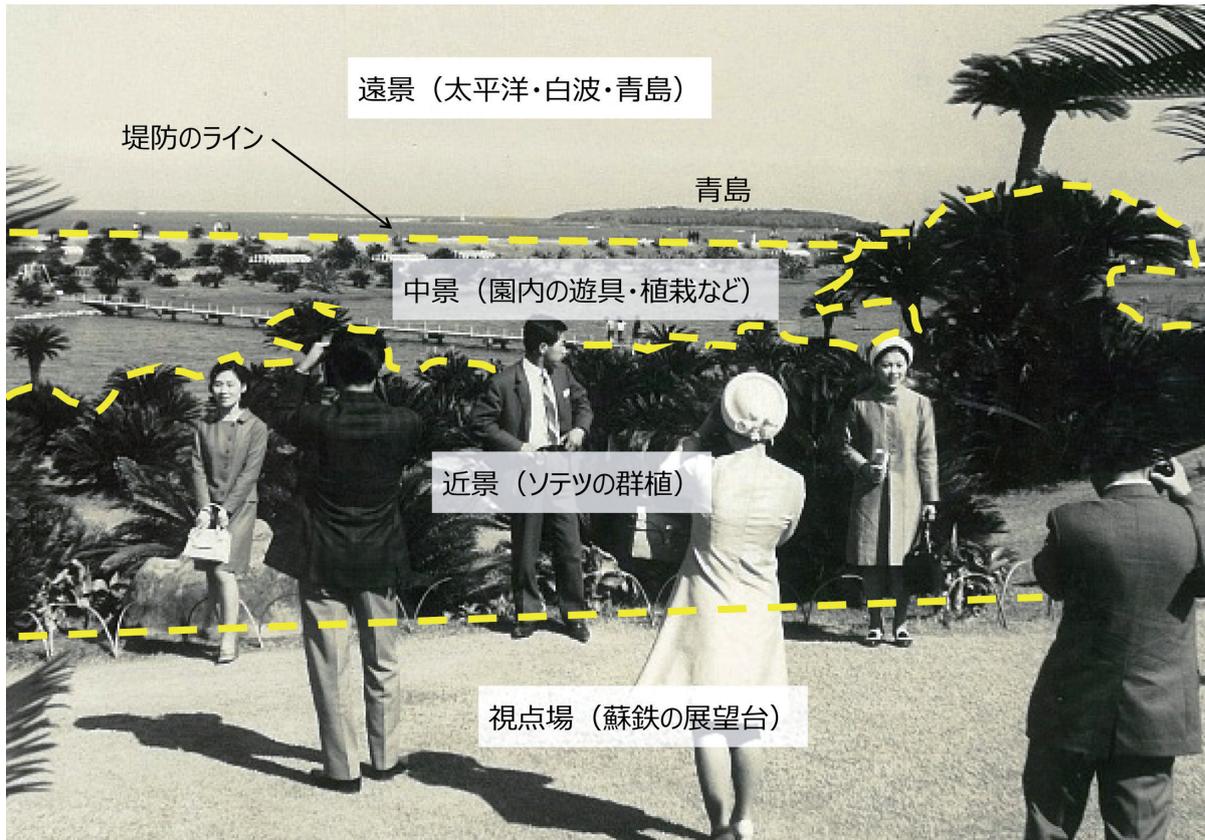


写真6 こどものくにの「蘇鉄の展望台」からの借景景観の解析（昭和40年代当時）

理解されていない。

岩切氏は、崖下に俯瞰できる鬼の洗濯板について、「珍しさは青島で見られるが、美しさはこのドライブインの前から見るのが一番である」と考えていた。そして、鬼の洗濯板は「白波が砕け散る波頭とともに見ないとわからないのであるが、その美しさをより一層引き立てるためにバナナの葉を通して、またはバナナの林を越えて見せると、一層南国的な感じが印象づけられて美しくなるのである」として、「これが下の方、海岸までの崖に一杯バナナの林を作ったゆえんである」と著している^{注5)}。

この崖下に植栽されたバナナの林越しに眺望する鬼の洗濯板の景観構成について解説すると、美しさをより一層引き立

てるために、バナナの葉の「近景」を通して、その先に白波が砕け散る波頭が上がる鬼の洗濯板を「中景」として見せている。さらに先に大海原の「遠景」が広がることで、ここでも南国宮崎のイメージと自然環境の両方を印象づけて、より効果的に美しいと鬼の洗濯板を感じるように景観を構成したのである（次頁写真7）。

5. 後世への南国景観の継承

1937（昭和12）年、堀切峠にフェニックスが植栽されてからすでに82年が経過した。その間に日南海岸は、1950（昭和25）年に「新日本観光地百選」（毎日新聞主催）の「海岸の部」において全国4位に入選して全国に認知され、1955（昭

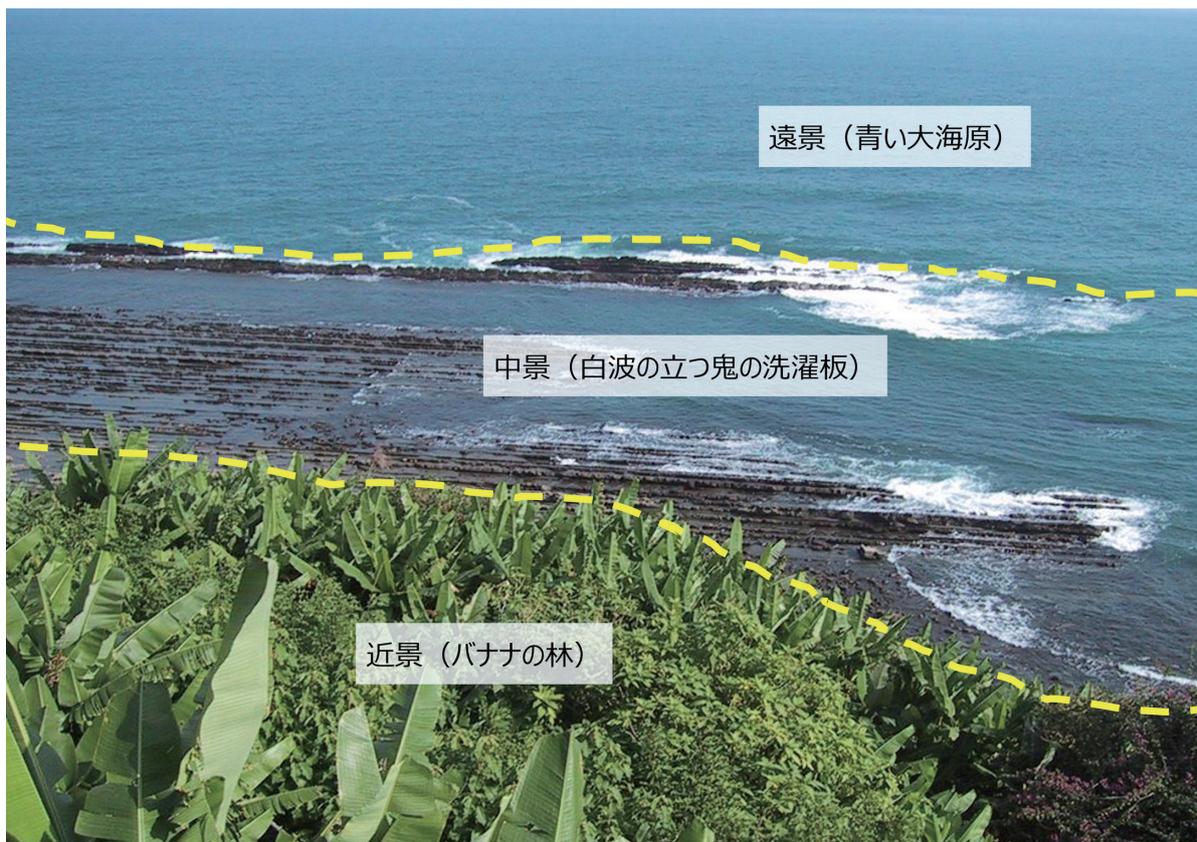


写真7 道の駅フェニックスの鬼の洗濯板を取り込んだ借景景観の解析

和 30) 年に国定公園に指定されて沿道整備が進捗し、そして 1960 年代後半から 1970 年代前半（昭和 40 年代）の新婚旅行ブーム^{注6)}により多くのカップルがこの景色を眺望し、今も宮崎県を代表する観光地であり、そして県民にとっての郷土景観となっている。

ここまでの発展のひとつの要因には、景観工学を理解した高度な視覚技術が利用されていたところも大きいと考える。しかし、この優れた視覚技術の方程式を知らずに後世、うっかり壊してしまう可能性が多分にある。そのため、南国宮崎の風土景観として 50 年、100 年と継承するためには、岩切氏が用いた高度な視覚技術の十分な研究と理解が今必要と考える。

補注及び引用文献

- 1) 青島亜熱帯性植物群落は、1921（大正 10）年にすでに天然記念物指定されており、さらに 1952（昭和 27）年には名称変更されて特別天然記念物指定となっている。
- 2) 植栽したフェニックスは当時、中村園芸場の創業者である中村林太郎（1890～1971）氏が、アメリカから取り寄せた種子から 5 年の歳月をかけて発芽させ育成した苗とされている。岩切氏はそれをアメリカで造園業の経験のあった稲用富雄（1889～1970）氏に依頼して最初、何百本かを苗圃で育成した後、日南海岸などに植栽した。稲用氏はその後、1939（昭和 14）年から 1970（昭和 45）年まで、岩切氏のもとで宮崎交通の造園緑化事業に尽力した。
- 3) 視点を移動させながら次々移り変わっていくシーンを継続的に体験する景観。具体的には散策路での歩きながらの景観や道路からの自動車などから見た景観のことを指す。
- 4) 岩切章太郎（2004）：心配するな工夫せよ、鉦脈社、209～212 頁
- 5) 岩切章太郎（2004）：心配するな工夫せよ、鉦脈社、224～217 頁
- 6) 新婚旅行ブームの 1974 年のピーク時には、全国で結婚した約 3 分の 1 の 37 万人余りが宮崎を来訪した。